

「志」ある学び舎

小 田 秀 邦

満開の桜やゴールデンウィークに別れを告げ、カレンダーはもう6月。新しい環境に身を置いて、あるいは何かしらの新しい役割を得、新年度からの2カ月を駆け抜けたひとは多いことだろう。わたしも職員として10年以上お世話になった神学部から、司法研究科（法科大学院）へ異動となった。

神学部と司法研究科って、全く違う環境でしょう？とよく言われる。4月からの働きにおいては、やはり右も左もわからない状態で正直戸惑うことも多い。しかし同時に、その設立理念に触れ、学生や同窓の方々とお話すると、大きな共通点にも気づく。そこにいる「志」ある人たち、である。司法研究科では、将来法曹として、困難な状況にあるひとの側に立ち、寄り添い導くために自らを鍛える人たちがいる。神学部では、牧会者として、教会をはじめとしたフィールドで、隣人に寄り添い導くために自らを高めようとする人たちが学んでいる。もちろんいずれの学部・研究科も、身に付けたスキルをもって、企業や公的機関などで活躍する人材も多い。

「同じ関西学院なもの」…はっと気付いた。教育研究へのアプローチは違っても、幼稚園から大学院・研究所まで、すべてに同じことが言える。誰かに寄り添い、貢献するために自らを鍛える、高める。それは第4代ベーツ院長が提唱された“Mastery for Service”であり、またそれを体現するためには、第2代吉岡院長が「聖書と礼拝なくして学院なし」とおっしゃったように、学院に受け継がれるキリスト教主義と、それに裏打ちされた倫理観が欠かせないのだ。

学院のキャンパスのひとつである西宮上ヶ原には、230種5万本以上の木々が生育しているという。これまで様々なひとにより種が蒔かれ、“多様性”という森を形成してきたその土壌には、キリスト教主義が脈々と流れている。

多様性のなかで培われてきた倫理観を礎に、将来他者に寄り添い導く強い「志」をもって働き、学ぶ人たち。さて、自身はどうか…。

“いまの自分”についてふと考える。抽象的な想像を廻らしながら、では具体的に何をなすべきか？どのような志をもつべきか？上下左右にアンテナを張って、気負わず探していこうと思う。

(司法研究科事務室職員)